令和５年度　学校自己評価システムシート　（ さいたま市立指扇小学校 ）　　学校番号　０５８

【様式】

目指す学校像	「教育は人なり」をモットーに、教育目標「やり抜く子の育成」の実現のため、チーム指扇小が一丸となり、学びの改革を推進する。①笑顔輝く子　②力を磨き合う教職員　③考え、対話する組織を柱とする学校づくりを進め、笑顔の花咲く指扇コミュニティ・スクールを拡充する。
重点目標	1　主体的・対話的で深い学びを実現するため、教育指導の充実に努める。 2　安心・安全の視点の下、教育環境の整備に努める。 3　子どもを見守る教育の推進を図るため、学校、家庭、地域との連携を深める。 4　専門性・得意分野を活かして力を発揮するプロ集団を目指し、教職員研修の充実を図る。

※重点目標は４つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目は複数設定可。
※番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

達成度			
	A	ほぼ達成	（８割以上）
	B	概ね達成	（６割以上）
	C	変化の兆し	（４割以上）
	D	不十分	（４割未満）

学校自己評価								学校運営協議会による評価
年度目標					年度評価			実施日：令和６年１月３０日
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策	学校運営協議会からの意見・要望・評価等
1	〈現状〉 ○全国や市の学習状況調査等では、学習に対する関心・意欲・態度に関する質問に肯定的な回答をした児童の割合は全国、市平均を上回り、良好な結果である。 ○行事等では、特別活動の学級会における「指小スタンダード」を活用し、司会や挨拶の言葉等を行ったり、各教科のまとめをプレゼンテーションしたりすることを意欲的に取り組む児童が育っている。 〈課題〉 ○全国や市の学習状況調査等の分析結果から課題解決に向けて、粘り強く学びに向かう力（非認知能力）を高めることが必要である。 ○各学級に学習に自信をもつことができない児童が複数いる現状から、学習することの意義を実感し、達成感や充実感を味わえるようにすることが課題である。	・学びの自律化・探究化に向けた情報端末の活用、授業改善	①　ドリルパーク、スタディサプリなどにより学習への取組状況を分析し、児童が目標をもって主体的に学べる「探究的な学び」を実践する。 ②　エバンジェリストのリードの下、ＩＣＴを活用した公開授業を年１回以上実施し、学校全体で教職員のシン・ＧＩＧＡスクール構想に則った授業力を上げる。	①　学校自己評価（児童）の家庭学習に係る項目の肯定的な回答が昨年度を上回ったか。 ②　学びの指標等、ＩＣＴの活用に係るアンケートの肯定的な回答が市の平均より上回ったか。	①　児童の家庭学習に係る項目の肯定的な回答が昨年度を下回ったが、授業でわかったと感じるが 3.41 点を維持、タブレットが学習に役立つが 3.57 点を維持し、好評価である。（４点満点中／以下同様） ②　学びの指標等、ＩＣＴの活用に係るアンケートの肯定的な回答が市の平均と同等である。	B	①　第１回目の結果を各自が把握し、授業改善に努めた。引き続き、児童一人ひとりの学習意欲の向上のため、さらなる改善を図る。 ②　タブレットの活用等と教科の特徴を研究し、効果的に取り入れていくと同時に、価値付けていく。	学校全体の評価を数字やパーセントだけで成果を表すのは難しいところだが、よく行っていると感じる。 先生方がいきいきと指導する姿勢がよい。運動会や創立１５０周年記念音楽会並びに記念式典等において一丸となって学校を盛り上げるチーム力が見られた。自信をもって指導にあたってほしい。 出前授業、校内音楽鑑賞会、生活科凧揚げ体験、給食週間等の食育の充実(会食再開)、異学年交流(指小まつり)の再開等、体験の充実はたいへん成果があった。教育課程において経験する大切さ、そこで培う仲間意識等、学ぶ力の向上がある。タブレットも活用できた。その一方、タブレットによる視力の低下等の健康面の心配、書字力の低下等の側面について併せて配慮する必要がある。
		・ともに学ぶ学校「真の学力の向上」「非認知能力の向上」を実現する教育活動の展開	①　情報端末を活用して児童向けアンケートや学習記録を蓄積し、児童一人ひとりの学習状況を把握する。 ②　最新の全国や市の学習状況調査の結果を基に、ＰＤＣＡサイクルを意識した授業を実践し、授業改善を図る。 ③　非認知能力向上のための「指小版単元カリキュラム」を構築する。	①　学校自己評価（児童）の授業に係る項目で肯定的な回答が昨年度を上回ったか。 ②　調査結果の分析結果を踏まえ、教職員が各自、授業改善の視点、手立てを設定することができたか。 ③　非認知能力向上のための授業実践等を公開し、教職員間で協議できたか。	①　児童の授業に係る項目で肯定的な回答が昨年度同等の評価を維持した。 ②　調査結果の分析結果を踏まえ、教職員が各自、授業改善の視点、手立てを設定することができた。 ③　非認知能力向上のための授業実践等を公開し、教職員間で協議できた。	B	①　児童一人ひとりの取組状況把握については、まだ十分ではないため、さらなる充実を図る。 ②　児童一人ひとりの特性を把握し、個別の課題を工夫していく必要がある。 ③　エバンジェリストとの情報交換等による連携を深め、授業におけるＩＣＴ活用の充実を図る。	
2	〈現状〉 ○学校自己評価（児童）では、「友達の気持ちを考え、仲よくすごす」」の質問に肯定的な回答４点満点中、3.64点となったこと、また「運動会などの行事や集会活動を楽しみ」の質問に肯定的な回答４点満点中、3.56点となり、前年度比より上回った。このことから、児童は学校を楽しみにしている様子が伺われる。 〈課題〉 ○児童一人ひとりを見逃さず、児童理解・状況把握を確実に行い、個に応じた適切な対応を行うため、組織的に支援や相談の対応する体制強化が課題である。 ○怪我や体調不調等の対応において、児童が安全に安心して過ごせるよう、組織的に安全管理を徹底するシステム強化が必要である。 ○リフレッシュ工事に向けて中長期的視野での計画的で見通しをもった学校経営を進めるため、市教委等の担当課と密に連携する。	・個に応じたきめ細かな教育支援や相談等の校内体制の充実	①　「心と生活のアンケート」及び面談等の記録を蓄積し、児童一人ひとりの状況を継続的に把握する。 ②　３部会（生徒指導・教育相談・特別支援教育）及びケースカンファレンスを実施し、組織的な支援・相談を行う。 ③　個別最適な学びの環境として、支援室『スマイル』の組織的運営を実施する。	①　学校自己評価（児童）の学校が楽しいかに係る項目の肯定的な回答が昨年度を上回ったか。 ②　学校自己評価（教職員）の児童理解に係る項目の肯定的な回答が昨年度を上回ったか。 ③　学校自己評価（保護者）の相談等に係る項目の肯定的な回答が昨年度を上回ったか。	①　児童の学校が楽しいかには肯定的な回答が 3.6 点を維持し、保護者からは思いやり、進んで学ぶ姿勢、運動を頑張るが昨年度と同等で 3.2 点の評価である。 ②　教職員の児童理解への肯定的な回答が 3.41 点となり、よりよくしようという改善意識が高い。 ③　保護者の相談への肯定的な回答、親切・丁寧・迅速な対応により 3.45 点の評価で昨年度を上回った。	A	①　授業の工夫や行事の充実を図り、魅力ある学校づくりを目指す。 ②　個々の児童に寄り添うため、さらに教育相談・生徒指導・特別支援教育の専門的なノウハウを取得する。 ③　支援室『スマイル』の支援がチーム結成により組織的に行えた。さらに個別最適な学びのシステムづくりを図る。	子どもたちが心と生活において、健全にのびのびと成長できるようにするには、学校だけでなく家庭と地域と学校のつながりが大切である。子どもたちの表情がさらに輝くために、もっともっとつながりを強め、お互いが補いながら協働して進めたい。 支援室『スマイル』は校内支援教育センターの機能を担っており、取組が素晴らしいと評価する。スマイル委員会というチームを立ち上げ、全教職員の理解と協力の下、組織的に児童を支援する仕組みをつくったことが画期的である。多くのスタッフが児童を応援・支援する体制はモデルになる。 リフレッシュ工事が開始されるにあたり、市教委の担当課や業者等と密に連携、協議を重ね、安心・安全な教育環境を確保できるようにする必要がある。
		・安心・安全な学校の実現に向けた教育活動の土台の強化	①　マニュアルに基づき、安心・安全に係る管理を確実に行い、訓練等の行事や教職員研修等により、体験を通して考える機会を確実に実施する。 ②　情報を正確に把握し、状況に応じて迅速かつ適切な対応ができるよう、指扇ミーティング等の実施により組織的に共通行動をとる。	①　行事や取組、教職員研修等を実施し、ＰＤＣＡサイクルで実践力をつけることができたか。 ②　学校自己評価（保護者・教職員）の安心・安全に係る項目の肯定的な回答が昨年度を上回ったか。	①　行事や取組、教職員研修等を実施し、ＰＤＣＡサイクルで実践力をつけることができた。特にコロナ５類移行後の水害、防犯等各種訓練が適切に実施できた。 ②　学校自己評価（保護者・教職員）の安心・安全に係る項目の肯定的な回答が昨年度と同等の評価を維持した。	B	①　安全に関わるマニュアルやガイドラインに基づき、保健指導、給食指導、施設管理ができた。リフレッシュ工事の開始が近づき、新しい動きが始まっても落ち着いて誰もが気持ちよく生活できるように、安全意識の育成と施設管理の維持を継続する。	
3	〈現状〉 ○「笑顔の花咲く指扇」をスローガンに発足した本校のコミュニティ・スクールにおいて、「郷土愛」「社会性」を身に付けた児童の育成の実現を目指す。 ○創立１５０周年を記念する事業を展開し、式典や記念誌等により伝統や歴史を継承する。 〈課題〉 ○学校運営協議会で情報共有するとともに学校と地域がつながるような情報発信や協働の取組をさらに増やしていくことが必要である。	・地域とともにある学校づくりを目指した指扇ネットワークの構築	①　学校運営協議会にて、目指す子どもの姿を具現化する方策を協議する。 ②　持続可能な取組となるよう、取組の評価、改善を行う。	①　学校運営協議会年３回の会議を要に、ＳＳＮに関連するネットワーク会議を実施できたか。 ②　目指す子どもの姿を実現するため具体的な取組を企画・実施できたか。また、次年度へつながる方向性が見えたか。	①　学校運営協議会年３回の会議やＳＳＮに関連する防犯、図書等のボランティア会議等、ネットワーク会議を実施できた。 ②　目指す子どもの姿を実現するための取組は「指扇まつり」への吹奏楽の参加や「避難所訓練」へのＣＳ児童参加等、実施できた。	B	①　本校テーマの郷土愛、社会性を実現するため、地域連携の取組を増やす。 ②　今後は児童自身の主体的な参加を目指す機会を構築する。	令和５年５月の新型コロナウイルス感染症５類移行後の学校行事等、積極的に実施してきたことを高く評価する。特に、創立１５０周年記念事業をはじめ、各行事や取組により児童の活躍や教育活動の成果が光った。ストレス社会を生き抜くためにも健全な児童の育成には欠かせないものである。 コミュニティ・スクールでは指扇地区の成熟した地域力を存分に活かし、益々野外活動や体験活動を取り入れた活動を充実させるとよい。放課後チャレンジスクール等の活動にも位置付けるといい。
		・地域のつながりを強くする方策や機会の創出	①　本校ＨＰ内に、学校運営協議会等の情報を発信し、家庭、地域と情報を共有する。 ②　家庭や地域とつながる行事等の機会を増やす。	①　ホームページに魅力的な内容を提示きたか。好評な感想が寄せられたか。 ②　家庭や地域とつながる機会が増えたか。	①　ＨＰの活用が広がり、ＰＴＡも連携し、必要な情報配信の提示ができた。 ②　創立１５０周年を記念する行事を始め、学校行事、地域の催し等、家庭や地域とつながる機会が増えた。好評が寄せられた。	A	①　ＨＰをさらに活用し、地域学習や地域人材の協力、学校運営協議会の情報等、地域とのつながりを発信していく。 ②　学校行事や取組の充実により児童の成長や活躍の場を数多く行う。	
4	〈現状〉 ○３年間の研究委嘱を終え、新たな学校課題研究として、『Well-beingを実感する児童の育成～非認知能力の向上～』を研究課題に掲げ、研究を推し進める。 〈課題〉 ○今年度からの市教委の示す「研修履歴を活用した対話に基づく受講奨励」の取組に基づき、教職員が自らの資質向上のため、個々に主体的・対話的で深い学びをマネジメントする。	・子どもたちのWell-being～子どもたちがよりよい人生を歩むために～『指扇プロジェクト２０２３』の研修の実施	①　学校課題研究を通して、一人ひとりの教職員が年間を通じて取り組む研修の目標を設定し、目標達成に向けた取組を各自年間１回以上公開する。 ②　専門家を招いた専門的見地の高い指導助言を活かし、自ら発信する研修として教職員一人ひとりの意識を変え、各自が研修をマネジメントし、履歴を記録する。	①　『指扇プロジェクト２０２３』の取組を各自できたか。 ②　教職員一人ひとりがキャリア振り返りシートの資質・能力の自己評価が年度当初より上回ったか。また、自己評価シートの研修に係る項目の評価が昨年度を上回ることができたか。	①　『指扇プロジェクト２０２３』として、意欲的に研修に取り組めた。中でも外部講師招致や学習会開催等、新しい研修のスタイルが推進できた。 ②　教職員一人ひとりがキャリアの資質・能力や研修に係る項目の自己評価が昨年度より上回る教職員が増えた。	B	①　３年間構想の『指扇プロジェクト』の本格的な発進をする。 ②　児童の非認知能力の育成に関する見識を高めた。教育活動をより効果的なものとする研修推進ができ、さらに研鑽を積む。	新しい『指扇プロジェクト』の研究推進がされたことは、これから楽しみな取組である。先生方が自分事として研修を主体的に実施できたことは大きな財産になる。 一人ひとりの先生方が自身のキャリア段階に応じて、研修を進めていくことに意義がある。先生方が自信をもって教育を進めることが児童のWell－beingを実現させるだろう。